Vol.39 『駅前活性化とは ～南房総一般論として～』（平成16年5月10日）

標題を書いて“ふと”考えてみたら駅前の活性化に熱心なのは、木更津、君津、館山くらいかなと気が付いた。

活性化とは？誰のために活性化を求めているのだろうか。

そのために外部から大型店や大企業を誘致する。

それは誰のためだろうか。

「無医村に花は微笑む」の著者将基面誠（木更津市在住、現君津市在職中）は、僻地岩手県田野畑村の村医として１９年、医師としてだけでなく村の活性化にも早野村長を助けて、企業を一切誘致せず大自然（僻地）の厳しさ・美しさ・おいしさを「田野畑ブランド」として行商感覚で村を育てました。

将基面先生の医療は「病人を治すことよりも病人を作らないことです」と言われ、経済の活性化もダメになった街、店を再建するのは大事（おおごと）であり、病人と同じ様にダメな店を作らない様な努力を明日でなく今日からしたいものです。将基面先生は、僻地という文化の大きな格差、都会の物真似でない美しい豊かな大自然をブランド化して、行商感覚でインターネットへと乗せて全国へと送り届けているという。

私から一つの案ですが、南房総の駅前開発および活性化は、大型店、大型ショッピング街を考えるよりも、時代の変化、趨勢に順応して駅前には通勤者を主とした集合住宅街化して、小売店舗をスキ間に張りつけて、老若男女が歩いて暮らせる街づくりを行うこと。

モータリゼーションは、今や当たり前のようなライフスタイルとなり、郊外でのショッピングを楽しむ術として位置づけられます。駅前には駅前に即した街づくり、車社会には車社会に即したそれぞれの特性を活かした街づくりが重要であると思います。

「Ｓ社」が君津駅前にショッピング街を作らず、２棟のマンションを作ったのは私は先見性を持っていたからと今思います。

観光を考えた場合、近代都市と古い城下町の格差やコンクリート街と、緑と水の大自然の村という環境の違いをどう生かすかが重要です。

アクアラインを超えて来た車が、木更津に立ち寄らないのは、対岸と変わらない街並み・商店街だからではないでしょうか。むしろ昔ながらの花街の方が良いのかも知れません。